絵本および副読本にみる「性交」と「経腟分娩」

――北欧と日本の表現の違い――

「性を語る会」代表 北沢杏子

■デンマークの絵本「あかちゃんはこうしてできる」（1982 年刊）

P.H. クヌートセン・さく
きたざわきょうこ・やく
1982 年 アーニ出版 刊

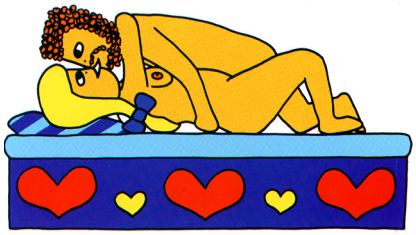
この絵本の始まり（p1）は、

「あかちゃんは、どんなふうにしてできるかおしえてあげよう。おとうさんとおかあさんは、ちからをあわせて、あかちゃんをつくるんだ。

あかちゃんがおおきなったとき、ふたりは、いっしょにすんでいないこともある。でも、さいしょにあかちゃんをつくったのは、おとうさんとおかあさんなんだよ」

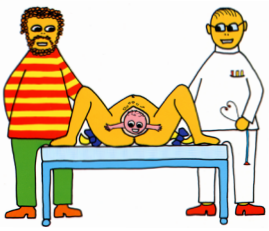
つまり、“ひとり親”家庭で育っている子どもも少なくない現在、それを想定して第 1 頁目に書き入れるという作者の視点に感動して、私はこの絵本を出版しました。

この絵本の「**性交**」**の場面**は、こうに描かれています。



ふたりは、よこになって、おちんちんを、ちつのなかにいれる。
さあ、これで、あかちゃんをつくるじゅんびができた。
おとうさんのせいしは、おちんちんからでてきて、おかあさんのおなかのなかの、あかちゃんのたまごに、たどりつく。
あかちゃんがほしいときは、こんなふうにすればいいんだ。
これを、「せいこう（samleje）」というんだよ。

■おかあさんのどこから生まれてくるか？を、はっきりと示す



あかちゃんは、ほら！
おかあさんのちつから、
こんなふうにして、でてくる。
めが、くりくりした、
かわいいあかちゃんだね。

日本では、こんな絵本は、親も先生も受け入れないでしょうね。

■スウェーデンの絵本「イーダとペールとミニムン」

ファーゲルストローム 作　きたざわきょうこ 訳　1991 年 アーニ出版 刊

「パパのペニスは、ママのワギナにはいる。こんなふうに“いっしょになる”ことをせいこう（samlag）っていうんだ。こうしてママとパパはあかちゃんをつくったのさ」とあります。

私がこの絵本で気に入っているのは、**お父さんが手描きで、性交のイラストを描いている**モノクロのページ（左下）です。

「あかちゃんはどうしてできるの？」という子どもの質問にこたえて、父親が鉛筆を手にとり、描きながら説明するところが、自然な感じでいいですね。北欧の「**個を尊重する文化**」と、日本の「**空気を読むことに腐心する文化**」の違いでしょうか。

■ムンメル――なぜ子どもを生むのか

スウェーデンの、思春期の生徒たちのための副読本。**出産の場面（経腟分娩）**を、強く表現しています。日本では、このような副読本にはクレームがつくでしょう。

フランシス・ヴェスティン 著
ホルスト・テューロスコルビー 写真
北沢杏子 文　/　1988 年　アーニ出版 刊

サンナ（母親）は、一生懸命いきんでいます。大きくひらいた産道の出口（腟口）から、**ムンメル**（あかちゃんの名前）が押し出されてきます。

あかちゃんが、いっぺんに押し出されて、腟口が裂けたりしないように、助産師さんはムンメルの頭を注意深くおさえています。

スポン！と音がして、ムンメルが出てきました。おぎゃあ！元気な声が、あたり一面に響き渡りました。

日本では「性交」は禁句で、教科書はもちろん、メディアでも「性交渉」「性的接触」と表現されています。それに比べて、なぜか、ほっとする北欧の国々の「性教育のあり方」について考えてみましょう。産後のサポートも、北欧らしい素朴でほほえましい実写になっています。

■育児と仕事のはざまで

サンナはまだ、産後の疲れも回復していないのに、夜中に何度も母乳を与えなければなりません。職場に復帰して仕事も山積み。サンナはとても疲れて、母乳も、とまってしまいました。

クラウス（サンナのパートナー）は、ムンメルにミルクを飲ませます。そして、サンナが静かに休めるように、ムンメルをつれて散歩に出かけます。

そのあいだ、サンナは、オーボエを吹いて、体を休めます。